

# サダン・トラジャ族の葬送儀礼

——社会統合の問題を中心に——

秋野 晃司

## サダン・トラジャ族の葬送儀礼

### 目次

はじめに

第一章 サダン・トラジャ地域の概況

第二章 サダン・トラジャ族の宗教儀礼システム

第三章 サダン・トラジャ族の伝統的葬送儀礼

——調査事例——

おわりに

### はじめに

インドネシア共和国は三百を超える多民族国家として知られている。個々の種族はそれぞれ異なった言語・文化的形態をもち、独自の慣習法を維持してきた。本稿では筆者の村落実態調査にもとづき、南スラウェシ州サダン・トラジャ族の伝統的葬送儀礼をとりあげる。葬送儀礼は単に死者供養という意味だけではなく、社会的意味をもあわせている。トラジャではキリスト教・伝統的宗教を問わず、葬送儀礼中に、財であり、また交換財としても用いられている水牛を供儀というかたちをとって屠殺する。屠殺した

水牛の肉は、親族及び村人に贈与する。このような葬送儀礼における水牛肉の贈答慣行は、地域社会の社会秩序を形成し、同時に村人相互の連帯感を強めるのである。

本稿では葬送儀礼の民族誌的事例を提出してその社会的機能を考えながら、トラジャ村落社会の統合原理について考えてみたい。

## 第一章 サダン・トラジャ地域の概況

サダン・トラジャ族と呼ばれる人々が居住している地域は、インドネシア共和国の南スラウェシ州、タナ・トラジャ県である。この領域は、南緯二度四〇分〜三度二五分、東経一一九度三〇分〜一二〇度二五分の範囲にあり、面積三、六三一平方キロメートルである。この地域は、北から南へと流れるサダン川の上流域、海拔七〇〇〜二〇〇メートル余の山岳地帯である。集落は山の傾斜面に形成されている。トラジャの名称は、東部海岸部に居住するルーの人々(「ブギス人」)が、塩・海産物を求めて山から降りてくる人を「山の人」と呼んだことに由来している。

人口は一九七五年三〇九、四〇四人、一九八〇年三三〇、四七六人(外国籍一〇〇人を含む)で、増加傾向にある。

立っており、さらに自然村は二〜三の地縁集団サロアン(Saroan)に分かれる。この「サロアン」は「報酬」という語から派生したもので、儀礼における水牛肉、豚肉の分配対象組織として機能している。筆者の調査地域では、この他に家屋の建築、及び儀礼時の労働提供組織でもある。小都市ランテバオ周辺では、水田面積も広いところから、共同労働組織として機能している。

慣習には地域差が見られる。トラジャ人は共通の慣習をもっている領域を強く意識している。本稿ではこの領域を前記の行政村単位と分けて、「慣習法共同体」と呼ぶことにするが、タナ・トラジャでは三二の慣習法共同体に分かれている。筆者の調査地域ではこの範囲内で通婚が行なわれる場合が多い。

親族関係は、双系的(bilateral)である。宗教儀礼上重要な役割を果たす出自集団(Patrapuan)は、トンコナンと呼ばれる居住家屋の創設者を共通の祖として形成されるものである。この出自集団のメンバーが新たにトンコナンを創設すると分節の出自集団(Sangrapu)となり、慣習法共同体にはこれらの出自集団が網の目状に広がって人間関係の核となっている。

主なる生業は稲作農業である。土地が山岳地帯であるため、棚田が多く、天水に頼っている。南部地域には二期作

サダン・トラジャ族の葬送儀礼(秋野)

宗教は、トラジャ独特の伝統的宗教(Aluk to dolo)があるが、キリスト教を信仰する者が増加しつつある。キリスト教の布教は一九一三年にオランダのキリスト教伝道普及協会——プロテスタント系——が派遣した宣教師によって始められた。その後、医療、教育活動等を通じて広めた結果、一九四七年七五、〇〇〇人、一九六八年一八五、〇〇〇人、一九八〇年には二五〇、八二〇人がキリスト教となる。これは全体の人口の七六%を占める。ちなみに伝統的宗教人口は一八%、イスラム教人口は六%を占めている。このように伝統的宗教は、一九七〇年に政府の公認を得たにもかかわらず、数の上では減少傾向にある。しかしながら、キリスト教がトラジャの土着文化まで変えたとは言いがたく、キリスト教は土着文化を包摂しつつ存在していると見てよいだろう。この問題は別稿にゆずることとする。

タナ・トラジャ県(Kabupaten Tana Toraja)は九の郡(Kecamatan)、六五の行政村(Desa)に分かれる。行政上の役職である郡長(Camat)は県知事(Bupati)の任命、村長(Kapala Desa)は村民の選挙で決まる。郡長、村長には地元の名望家や軍の出身者が多い。彼等は行政の末端に位置し、徴税等の指揮にあたっているが、村落内の政治的にかかわりでは地域の慣習を尊重することを旨としている。なお、行政村は十数地区の自然村(Kampung)から成り

も見られるが、調査地域では一期作が行なわれている。他に換金作物として、コーヒー、丁子が栽培されている。

## 第二章 サダン・トラジャ族の宗教儀礼システム

### 第一節 伝統的宗教——Aluk

サダン・トラジャ族の伝統的宗教を意味する語はアルック(Aluk)またはアルック・トドロである。アルックは、本来はトラジャ固有の儀礼という意味であるが、今日では宗教(インドネシア語ではAgama)の意でも使用している。伝統的宗教人口は、一九七〇年一八、五二七(三八%)、一九七五年九七、三三六(三〇%)、一九八〇年五七、九〇八(一八%)で、数字の上では減少傾向にある。伝統的宗教者の「神」観念には、まず人類の創造神としてのプアン・マツア(Puang Matua)の存在がある。プアン・マツアは神々の中の至高神として崇拜されている神である。そして精霊神と呼ぶべきデアタ(Deatat)地域によつてはDewata、祖先神にあたるネネ(Nene)が存在する。デアタとネネは至る所にいると考えられ、この神々



の力によって宇宙秩序は保たれている。即ち、現世の安寧と繁栄はこれらの神々のなせるわざと考えられている。もし慣習に基づいた儀礼を怠ったり、誤った行為をなすと、現世に災いをもたらされると信じられている。このため、種々の儀礼で、水牛、豚、鶏を屠殺して神々に供儀をなし、宇宙秩序の安寧を願うのである。またこうした神々とは別に、靈魂ボンボ (Bonbo) が存在する。トラジャ人は、死亡時に死ぬのは肉体のみであって、靈魂は「この世」から「あの世」へ移行するものだと考えている。靈魂が円滑に「あの世」へ移行するためには、通過儀礼としての葬送儀礼を果たさなければならないのである。

## 第二節 宗教儀礼の体系

サダン・トラジャ族の伝統的宗教儀礼は、西側の儀礼 (Aluk rampe matampu) と東側の儀礼 (Aluk rampe matallo) として両者の境界に存する儀礼 (特別な名称はない) であるマネネ (Mainene) あるいは Majika) に分類できる。即ち、マネネの儀礼の位置づけの問題はあるが、東西の儀礼は二項対立的と考えてさしつかえない。個々の伝統的宗教儀礼の名称、そのプロセスにはサダン・トラジャ内においても地域差があるので、ここでは東北部スセア

ン、ティカラ地域を中心に論をすすめる。

西側の儀礼は隠喩的に「下降する煙 (Rambu solo)」ともいわれ、死の儀礼、即ち通過儀礼としての葬送儀礼である。これに対する東側の儀礼は太陽の儀礼、あるいは「上昇する煙 (Rambu tuka)」といわれ、生の儀礼、即ち神々に対する豊穡祈願、病氣治療祈願、悪霊祓い、繁栄祈願 (または感謝) 等をなす儀礼である。東西に属さないマネネの儀礼は祖先供養である。そして同時に、コスモロジカルに言えば、祖先に加わった故人が「西側」の領域から「東側」の領域に移行するための儀礼である。

西側の儀礼にはランクがあり、簡略な儀礼から綿密で念入りの儀礼へと大別して7分類することができる。以下に、低いランクの儀礼から高いランクへと、各儀礼を簡単に説明しよう。

(1) トルルク・バダン (To luruku pandan) タロ・マヌック (Tallo manuk) —— 妊婦が流産した時に行なう儀礼である。三ヶ月余で流産した場合は、家族の者がひな鶏を潰した後、流れた子を地中に埋める (To luruku pandan)。六ヶ月で流産した場合にはひな鶏を潰した後、流れた子を鶏卵とともに地中に埋めて弔う (Tallo manuk)。なお、流産が続いた場合はそれを止めるために、木にできた洞に流れた子を入れ、3日間おいた後に地中に埋める。

(2) ディシリ (Disili) —— 資力のない人が行なう儀礼で、かつては下位の身分階層の人が多く行なった。最近の傾向としては幼児の死亡時に行なう例が増えてきている。この儀礼は行なったとしても村落内での高い評価を得ることはできない。儀礼のプロセスには次の三方式がある。

① ひな鶏を潰した後、トンコナン内サリの部屋にある床の穴 (Kalotok) から地上へ落とす。そして豚の尻を棒で叩いてから、死者を布地で巻いて墓に納める。② 神々への供儀というかたちをとって豚を一匹屠殺し、親族と、死者の居住していたサロアンの人々が共食を行なう。その後死者を布地で巻いて墓に納める。③ 豚を一匹以上と犬を一匹、あるいは豚一匹以上と鶏一羽以上を屠殺し、親族と死者の居住するサロアンに豚肉を贈与し、共食の後、死者を墓に納める。

(3) ディサンガロイ (Disangaloi) —— この儀礼では水牛を一頭屠殺する。葬送儀礼で水牛を屠殺するのは村人に対して誇れることである。死者への供儀は葬儀祭司者トメバルン (To mebalun) が行なう。まず死者を布地で巻き、トンコナン南室のスンプンに西枕にして安置する。まず炉でひな鶏を潰し、これをサリの穴から地上へ落として儀礼が始まる。それから死者をサリに移し、南枕に変える。この時をもって故人の「死」が認知されることになる。トン

コナン前庭で豚を一匹屠殺し、参会者と共食する。死者はサリで二晩過ごした後、葬儀場ランテ (ストーン・サークル) へ運ばれる。ランテ内で水牛を一頭屠殺し、その肉をカンブンの人、死者の居住サロアン・両親の出生サロアン・配偶者のサロアンの人、親族に分配する。死者はその日の夕刻、墓に納められる。水牛を二頭屠殺することもあるが、儀礼のプロセスは変わらない (Dipentoe dua)。

(4) ディロンドン (Dirondon) —— 水牛を三頭屠殺するのが原則である。儀礼のプロセスは前述のディサンガロイと類似している。違いは、ランテ内北側に死者を安置するための仮小屋 (Lakian) を造り、そこに死者を一晩置くことである。水牛はトンコナン前で一頭、ランテで二頭屠殺して分配する。水牛を四〜五頭屠殺する場合も同様である (Dipuli Dirondon)。

(5) ディララユ (Di layu-layu) —— 水牛を三頭以上屠殺するのが原則である。同一カンブン内でひとつの出自集団から二つの葬儀を出し、かつ一方の葬儀をこれより上位のランク (Dirapa) で行なう場合に他方の葬儀をディラユと称する。葬儀祭司者トメバルンは双方の死者に供儀を行なう。儀礼進行はディロンドンと同様で、ランテに死者を運ぶ際に他方の死者と合流することになる。墓に納めるのも同時である。屠殺する水牛はトンコナン前で一

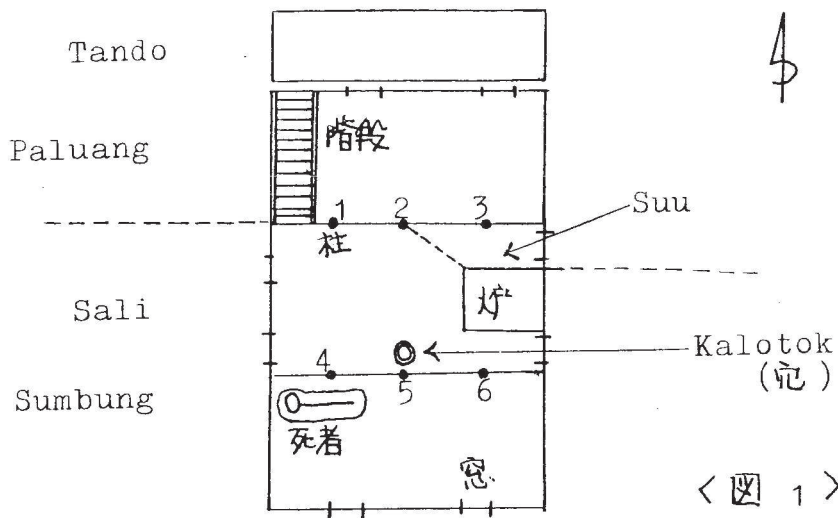
頭以上、ランテで二頭以上で、その肉の分配対象はディサ  
ンガロイで既述した人々と同様である。

(6) ディラバイ・プリ・ミサ (Dirapai puli misa) ——  
水牛を七頭以上屠殺するのを原則とする。スセアン地域で  
は第一階層 (Tomakaka) のみが行なえる葬送儀礼である。  
儀礼過程は第三章に事例として提出する。

(7) ディラバイ・プリ・ドゥア (Dirapai puli dua ある  
いは Sapuranadang と同じ) —— 葬送儀礼としては最  
高のランクに位置する。水牛は十二頭以上屠殺しなければ  
ならない。また、皮太鼓を二つ使用し、大きい旗 (Tomhi)  
をトンコナン前に掲げるのが原則である。(筆者が立ち会  
った調査では、水牛の屠殺数を除けば原則通り行なってい  
ない例もあった。) 現象的儀礼過程はディラバイ・プリ・  
ミサと同様である。

以上が、サダン・トラジャ族の伝統的葬送儀礼である。  
儀礼のランクづけは水牛の屠殺数によってなされ、これは  
また伝統的身分制度とも関係する。調査地域においては水  
牛は農耕に使役されることはなく、貨幣としての機能を果  
たしている。即ち水田の売買、建築費用、墓造り費用等の  
高価な支払いに使用されているのである。この高価な社会  
的価値をもつ水牛を葬送儀礼では犠牲獣として惜しみなく  
消費しており、ここに宗教儀礼の特徴がある。

# TONGKONAN TOSHIPATE



## 第三章 サダン・トラジャ族の

### 葬送儀礼——調査事例——

本章に提出する葬送儀礼は、高ランク (ディラバイ・プ  
リ・ミサ) に位置し、調査地域第一階層 (Tomakaka) の  
みが行なう儀礼である。儀礼は、スセアン郡・ティカラ村  
で、一九八一年十月三日より二十六日にかけて行なわれた。  
出自集団トンコナンの名称はトシパテである。

まず、状況説明から記述する。葬儀対象者は、一九八一  
年四月十日に亡くなった年令九十五歳前後の女性で、老衰  
である。死者はトンコナン内中央部の部屋 (サリ) の柱  
(図1の4) に背を凭れ、足を伸ばし体を北に向けた状態  
で置かれる。三日後、遺子・近隣の親族が、白い布地と手  
織の布地 (Pondan) で遺体を巻く。その時、遺体は伸ばし  
た状態であり、竹筒を遺体にあて屍汁 (Bolio) をとる行為  
を行なう。終わると、遺体は南側の部屋 (Sumbung 図1  
参照) に西枕にして安置する。屍汁入り竹筒は頭側の壁に  
立てかける。故人は医学的には息を引きとっているのだ  
るが、トラジャの世界観では、通過儀礼としての葬儀が行  
なわれるまでは「この世」の人である。それ故、死者は寝て  
いる状態 (To makura) にあると考えられている。従って、  
家族は食事時間等には呼びかけると言われる。しかし、葬

東側の儀礼は「生」に関する儀礼として一括することが  
できるが、個々の儀礼の内容とプロセスは多種多様である。  
ここでは詳細は省略するが、本稿でとりあげる葬送儀礼と  
関連するマブア (Mabua) の儀礼について触れておきたい。  
この儀礼は、東側の儀礼では最高位の儀礼である。現象的  
には、出自集団の豊穰と繁栄をいや増すためにとり行なわ  
れ、それは同時に、先のディラバイ葬儀の故人をこの世に  
「再生」させる儀礼でもある。それ故、このマブアを行な  
うためには出自集団でディラバイのランクの葬儀をなし、  
その後マネネの儀礼を果たし、悪霊祓いの儀礼 (Maro  
nabua) を終えて初めて遂行が可能となる。儀礼の期間は  
一年余に亘り、水牛二頭と多数の豚を屠殺して、村人と親  
族に分与する。この儀礼を為し遂げることは出自集団のメ  
ンバーにとって名誉であり、社会的評価をも受ける。この  
ため儀礼遂行のためには総ての資力を傾けるのである。  
ディラバイの葬儀で「あの世」へ送られた死者はマブア  
の儀礼によって「この世」に再生する。トラジャの宗教儀  
礼では「生」と「死」は二項対立的であり、同時に循環構  
造にとりこめられている。



餼までは食事をそなえる行為はない。葬送儀礼がとり行なわれるのは死亡した時から半年余たってからである。この理由は、高ランクの儀礼を無事に遂行するために高額の費用がかかり準備が必要なこと。この地域が五月末〜七月にかけて稲刈りで、農業労働に人手をとられ葬儀での協力が得にくいこと。さらに、伝統的宗教を信仰している人々にとって、葬儀での水牛・豚肉を食して水田に行くことは、死の穢れにより稲の成育・実りを悪くすると考えられており、農繁期の葬儀を忌避する慣習があることなどによる。なおトンコナン・トシパテには、「西側の儀礼」最高位のディアバイ・プリ・ドゥアを行なうだけの資力・地位がありながら、次位の儀礼を行なった。それは同村内 (Kampung) で「東側の儀礼」最高位のマブアが前年から行なわれているため、慣習上、同じ村内で東西の最高位の儀礼を同時に行なうことはできないことによる。

既述したごとく、葬送儀礼では水牛の屠殺と分配は、重要な行為である。水牛の提供者は原則として遺子である。仮に、遺子がいなければ死者の兄弟姉妹が提供し、配偶者及びその兄弟姉妹は提供することはない。この原則は水牛の提供が土地相続 (主に水田) と関係しているためである。即ち土地相続は水牛提供数に応じて分与される。それゆえ、資力のない者は他者から借り、幼少の者は、オジ・オバ等

が立て替えて提供する。その時借りた分は、後日、貸し手の葬儀の際に同等の数・大きさの水牛で返済するのが慣わしとなっている。土地相続は、原則的に平等分割になっているのであるが、水牛提供数が土地分与に関係しているため、水牛の屠殺数に関しては兄弟姉妹及び近親者でお互い不満の出ないよう十分に話し合う。トンコナン・トシパテでは以下のように決まった。長男 (表175) 五頭、次男 (表177) 二頭、三男 (表181) 二頭半、長女 (表179) 二頭半、次女 (表184) 二頭である。これ以外に、他者から六頭、出自集団全体から一頭 (これらは兄弟姉妹の連帯責任で後日返済) 借り、合計二十一頭が葬儀に提供された。そのうち一頭が競売にかけられた他は、すべて屠殺・分配が行なわれた。遺子達の水牛提供数に差異が出ているのは、現実の家族状況・経済状況が考慮されたものである。例えば、長男はトンコナン・トシパテを継承し農業を生業としていて、子供も多い。それに対し次男は子供がおらず、多くの土地を所有する必要がある。三男は、小学校教師で給料生活者。次女は、前夫が公務員で恩給収入があることなどが考慮されたのである。

遺子の宗教は長男・次男・長女が伝統的宗教、三男・次女がクリスチャンである。儀礼中、長女は儀礼役職者トマ・トンコナン (To ma Tonkonan) として喪に服す。

葬儀は多くの人々の協力のもとに行なわれるわけである

が、積極的に労働提供をなすのは出自集団のメンバー、部落長 (Kapala kampung) と地縁集団サロアンのメンバー、そして全面的ではないが、参会し協力をなすのがカンブンのメンバーと姻族関係の人である。また、儀礼遂行上、欠かすことができないのが祭司者トミナー (To minaa) 及び葬儀祭司者トメバルン (To mebalun) である。トミナーは儀礼の全過程の総指揮をとる。トメバルンは死者に供儀等をなし、通過儀礼を遂行する。

この儀礼は、なるべく長時間かけ、念入りに行なうほど故人への供養となり村人の声価も得られるのだが、同カンブン内でマブアの儀礼が行なわれているため、このランクの儀礼としては最も短期間に終了した。というのは、マブアの儀礼は、カンブン内に死者が存在すると死の穢れで再開できないのである。

次に具体的儀礼過程を要約して記述する。

#### 第一日目 (十月三日)

儀礼初日はパブリ (Pabuli) と総称する。社会的行為としては、水牛を一頭屠殺し、村 (Kampung) 人に肉片を贈与する。(カンブン内に住む出自集団のメンバーは遠慮する。) 故人が生前に世話になった村人への御礼の意味をもって。同時に、トンコナン・トシパテと村人との連

帯を強める行為である。

初日の儀礼は、日が陰る午後開始するのが慣習である。トミナーは午前中に到着し、彼の指揮のもとで最後の準備が行なわれる。トンコナン前が葬儀場となり、竹を使って仮舞台が周辺に作られる。トンコナン前庭に三本の竹をコの字形に折り曲げて高さ一メートル余の仮小屋 (Lantan Sankin) 水牛をつなぎ屠殺する為の杭 (Sankin Tedong) 水牛の角を飾る棒 (Sumbuang) を立てる。参会者は午後になって増え始め、二百余名になる。葬儀祭司者トメバルンも到着し準備が整う。

初日の儀礼プロセスは次のように展開する。

午後2時30分、トメバルンが皮太鼓をトンコナン内サリにて打ち鳴らし、儀礼の始まりを告げる。村人の労働提供で男女各一名からなるアシスタント役のトマ・クワサ (To ma kuasa この場合は男性である) がトンコナン内の炉にて、ひな鶏の首をひねって殺す。ひな鶏はサリ南部の穴 (Katok) から室外へ落とす。近親の者によって、遺体がスンプンの部屋からサリ西側に運ばれ、南枕にして安置される。人々はこれをもって故人の「死」を認知する。死者の頭上にシサレアン (Sisarean 長さ一メートル余で縦二本横三本の竹を格子形にしたもの) が立て掛けられ布地がかけられる。故人の長女が子猫を両手でつかみ、「創造主よ、猫

は死んだ」と言いながら南側の柱(図1の6)に、上から下へこすりつけるように三回振り降す。この後猫は殺されずに放たれる。この地域の神話で、最初の人間が創造された時、最も早く傍にいた動物が猫であった。それゆえ、動物界では高い地位を与えられ、創造された人間の子孫が死んだ時、猫とともに「あの世」に行くことを象徴した行為である。長女は黒いサロンに着替える。上半身は何も身につけず、サロンを胸のところで結び、トミナーが彼女の頭を紐で縛る。遺体を墓に納めるまで紐をとることができない。これより彼女はトマ・トンコナンと呼ばれ、いくつものタブーが課せられる。飲食物では、米飯は食べられず熱い湯も飲めない。代わりにとうもろこし、バナナ、芋を食し、ツア(ヤシ酒)を飲む。また、行動上のタブーとしては、トンコナン前庭、トンコナン内バルアン(Paluang)、炬の北側スウ(Suu)に第六日まで入れない(図1参照)。この間必要があつて外出しなければならない時は、西側あるいは南側の窓から出入し、トンコナン南側でのみ用を果たす。トラジャの方位観では北・東は神聖な領域で、喪に服した彼女によって穢れるのを忌避するためである。

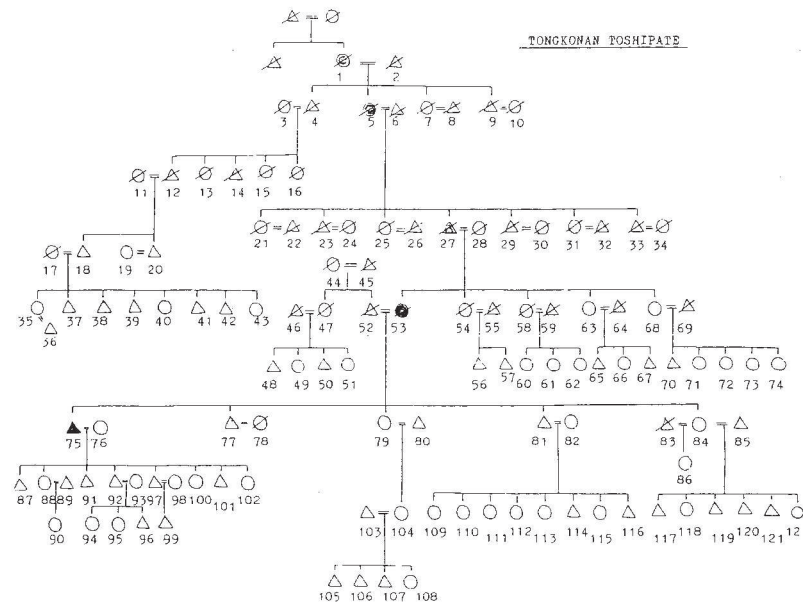
トンコナン前庭で神(Deata)と祖先神(Nene)に捧げる小豚を屠殺する時、トミナーが右手に噛みタバコの材料のボールとカロシ(木の実)を握り、小豚の心臓

部へ突き出して神に捧げる行為をなす。祈禱はなく、心臓部を小刀(Piso)で刺して屠殺する。続いて、トミナーの指で、水牛を屠殺する。屠殺方法は山刀(Rabo)で喉元を一撃のもとに切る。既述したごとく、この肉は村(Kampung)人に贈与する。分配は出自集団の年長者が行ない、トンコナン・トシバテと親密な人、及びかつての身分制度で第一階層(Tomakaka)の人には、多めに分配する。

儀礼行為はさらに続く。トミナーは長男の息子をトンコナン前の仮小屋に入れ、彼の頭を紐で縛る。これより、彼はトマ・シンボロン(To ma simbolong)と呼ばれ、トマ・クワサ同様儀礼執行の補助的役割を果たすことになる。彼はトマ・トンコナンとともに米飯を食せず熱い湯を飲めないが、行動上のタブーはない。トマ・クワサにも儀礼初日のみ同様のタブーがある。

トンコナン内にて、トマ・トンコナンが両手で遺体にさわりながら儀礼的鳴咽をする。終わると、彼女によって故人が生前使用していた噛みタバコ入れ(Sepu)が枕辺にそえられる。トマ・シンボロンがトンコナン内の柱(図1の5)に掛けてある金太鼓を打ち鳴らす。これらの儀礼行為の間、トメバルンは死者の傍らに蹲っている。

トンコナン前に、槍(Doke)、旗(Tombi)竹に細い布地



Tongkonan Toshipate の参加者 (死者は53)

祭儀の	79 To ma Tongkonan	1 頭	75	5 頭
儀礼役職	101 To ma Sinbolong	2 頭		
水牛の提供	18, 19, 56, 57, 63, 68	1 頭		
	77, 84	2 頭		
	79, 81	1 頭		
豚の提供	48, 49, 50, 51	1 頭		
(諸族以外)	60, 61	1 頭		

<表 1>



を垂らしたものの、カンダオレ (Kandaore) ビーズの編物を竹にかけ広げたものの、傘 (Lalan) 黒い傘を広げ竹の先端に結え付けたものを立てる。このことによつて人々に葬送儀礼が行なわれていることを知らせる。

夕刻、大豚・子豚各一匹を屠殺。大豚は参会者に分配する。子豚はトミナーの供儀用である。供儀用の肉片は竹筒に入れ、焼いて料理する (Piong)。供儀を行なう所は葬儀場ランテ (ストーン・サークル) 内の小さいサトウヤシの前である。トミナーは北向きにすわり、前にバアサッケ (Pasake) の葉を置き、その上に供物の豚肉を供える。トマ・シンボロンにサトウヤシの上で右手を三回反時計方向にまわさせる。そしてトミナーがサトウヤシに三回水をかける。供物はその場で食し、トンコナン内にもどる。そこで死者とトマ・トンコナンに少量の水をふりかける。サトウヤシへの供儀は、儀礼中に多くのヤシ酒がとれ、死者やトマ・トンコナンにもたらされることを祈つたものである。今後の儀礼行為の中でもしばしば見られるのであるが、トラジャ社会においては「右手」「右側」の優越性が強調される。また反時計まわり、そして同じ行為を三回繰り返すことも特徴である。

夜、参会者の男性達によつて葬送歌 (Mabang) が歌われる。これは、小指あるいは手の先の部分で互いにつながる。この日の儀礼行為を簡略に記述する。早朝にトメバルンが皮太鼓を打ちならし、この日の儀礼開始を知らせる。続いて彼は死者の頭上に細竹三本を立て掛け、その上に布をかける。そして死者に供儀を行なう。供儀は、まずバナナの葉を長方形に小さく切り、これを二枚重ねて床に置く。その上に噛みタバコの材料のブルー、カロシ (木の実) を小さく切つてのせ、カプー (石灰) をふりかけ、サンバコ (タバコの葉) をそなえる。さらに米飯を盛り、豚肉をそなえる。供え終わると間をおかず、一瞬にして、彼は供物を数物 (バナナの葉) で巻き包んでサリの穴から地上に落とす。(これはトメバルンが為す最初の供儀である。彼のそなえた供物は穢れの觀念から食することはない。) 再び、彼は皮太鼓を打ちならし、供儀を終えたことを知らせる。

続いて、それまで黒いサロシしか身につけていなかったトマ・トンコナンが、黒い上着を身につけ、頭に紺色の頭巾をかぶつて、死者の前に西むきに立ち弔意を表わす。

弔問客は十時前後から増えはじめ、関係筋の仮屋台に腰を落ちつける。多くの人は、儀礼主催者側からコーヒーやタバコの接待を受け、豚肉により共食を行ない、夕方には

がつて円形を作り、反時計まわりにゆっくり動きながら歌われ、休息を挟んで明け方まで続けられる。

## 第二日目 十月四日

マドヤ (Madoya) と総称し、参会者が最も多く集まる (約五〇〇余名)。早朝にトンコナン前で水牛八頭、供儀用の子豚二匹、午前中に大豚四匹、午後に一匹屠殺する。水牛肉の配分は以下のようなものである。トンコナン・トシパテの存在するサロアン即ち故人の出生サロアンに二頭分、故人の母親の出生サロアンに一頭分 (配偶者、父親の出生サロアンは故人と同一である)、トンコナン・トシパテの出自集団二頭分、姻戚関係を中心とした弔問客、祭司者、行政関係の職員等の客人に三頭分分配する。ただし、水牛の角は分配せずスンプアンに飾り屠殺数を社会的に誇示する。また、水牛提供者は腿から下の足一本分をとる。水牛の足首は、一つ五〇〇ルピア (約二〇〇円) で売られ、カンブンの共用コップの購入費用にあてられた。人々に好まれていた肉が柔らかい肝臓、心臓、肺の部分は、水牛の提供者、遺族、出自集団の主要なメンバー及びトミナーが優先的に受取る。分配方法は、各出自集団のリーダーの名を呼んでまとめて配り、その出自集団内で個々に再分配する方式と、世帯主単位、以上にあてはまらない個人単位に直接分与する方式がとられる。肉の量は、初日に既述したごとく、伝

分配の水牛肉を受けとって帰宅する。夕方、葬送歌が行なわれる。夜、トミナー四人が、米倉アランの前にすわり、トンコナンに向かって、トシパテの由来、その位置、また故人の榮譽を讃え、その出生から天界へ行く過程等神話的世界を大きな声で語る (マカカルン Makakurun)。

## 第三日目 十月五日

マバタン (Mabatang) と総称している。マバタンとは、葬儀場ランテ (ストーン・サークル) 中央部のカリヤの木をシンボリックに指している。名が示す通り、ランテでの儀礼が中心である。ランテ内で水牛を三頭屠殺する。(この内一頭は大地に捧げると称して首の上から山刀をふりおろして屠殺する。) 肉の分配対象はトンコナン・トシパテの居住サロアンとトシパテの出自集団である。また、この日子水牛一頭が競売にかけられ (五万六千ルピア、約二万二千円)、葬儀費用にあてられた。

この日の儀礼行為は次のように展開する。早朝から、葬儀場ランテの中央部カリヤの木のそばに太竹六本を用いて、高さ六・七メートルの櫓 (Barakaan) をつくる作業が始まる。同じく北側には細竹六本で高さ二メートル余の仮小屋 (Lantan sangkin) をつくる。トンコナン前では、トミナーの指揮のもとに死者を象徴する旗 (Bate Lepong) を作る。この旗は三メートル余の太竹を中心に細竹二本を



結えつけて逆三角形をつくり、この部分に市販の布地を何枚も巻く。上部先端に使用できなくなった編笠(サルーン)、下部に黒いサロンを着付け、そこにセブ(噛みタバコ入れ)を取りつける。この旗のもとでトミナーが子豚を屠殺する。彼は、血のついた小刀をもって死者の頭上にかけて布地のところへ行き血を塗りつけ、その布地も旗に巻く。この後、旗を立て、その下で彼は供儀を行なう。続いて、その旗の下に近親の老女が座り、儀礼的鳴咽を行なう。トミナーはトンコナン前の旗(Tombi)をランテ中央に立てる。トメバルンがランテ内の水牛の左耳一つを切りおとし、トンコナン内のトマ・クワサ(男性)に渡す。彼は炉の土鍋(クリン)の中に納める。この行為が終わると、トンコナン前から三十メートル余離れたランテへ行進を行なう。先頭は槍をもったトミナー、続いて金太鼓を打ちならすトマ・シンボロン、そして旗(Bate Lepong)、カンダオレ、ララン、その後から、サロンだけを身につけた少女達九名が頭に長い布(Pondan)をかぶり、叫び声をあげながら行進する(madudugan)。ランテに着くと、少女達は仮小屋の中を反時計まわりに三回まわる。トミナーのマカカルン、水牛の屠殺という順で進行し、続いて、トミナー二人が櫓に登りマカカルンを行なう。その後、豚肉の小片を死者へと称して北・東・西と地上へ放る。さらに、水牛の小片を「遺

産を分ける」と称して地上へ放る。これらの肉片は誰れも拾わない。次にトミナーの指示で、トマ・クワサ(女性)と出自集団の老女三名が金太鼓を打ちながら、竹竿に吊した水牛の肉片七切れを、村(Kampung)人以外の人へと称してランテ内を三周して配る。以上を終えたと水牛肉の分配に入る。夕刻、トメバルンの指示で洞窟より二メートル余のカヌー型くり舟エロン(Erong あるは Kayu nate という。木臼 Ison pandang と同型で片方の端に水牛の頭部が彫られている)を引き出し、トンコナン内サリ西側に運び入れる。トメバルンがくりぬかれた部分に割竹を置き、山刀によってこれを打ちながら鳴咽の声を出す。その後、遺族が遺体を籐の輪三つに通して持ち上げ、エロンの上にのせる。再びトメバルンが鳴咽の声を出し一連の行為を終える。近親の女性が小額の小銭をトメバルンに手渡す。

#### 第四日目 十月六日

参会者は昨日からこの日にかけて帰宅し、儀礼役職者、葬儀祭司者、近親の者だけになる。故人の長男がランテ内でカロシを土中に埋め、そこにサトウヤシを植える。神々に捧げるという。トメバルンは屍汁入りの竹筒(Bollo)をトンコナンの床下にくくり付ける。彼は、この日も、子豚を一匹屠殺し、死者への供儀を行なう。

#### 第五日目 十月七日

行為を止める(Tario)と称し、休息日である。休息日は儀礼終了まで五日ある(表Ⅱ参照)。以後は記述を省略する。

#### 第六日目 十月八日

トマ・トンコナンのタブーが一部解ける日である。早朝、トメバルンが子豚を屠殺し、今まで通り死者へ供儀を行なう。続いて、高坏状の木皿(カンジャンランカ)に料理したバナナ、豚肉、とうもろこしを入れ、この上に山刀を置く。この山刀の上にバナナの薄切を三切れのせ、さらにこの上へ豚肉を二切れのせる。しかる後に、これらを手でつかんでサリの穴から下へ落とす。同じ動作を三回繰り返したのち、今度はトマ・トンコナンに落とさせる。これが終了すると、彼女の湯を飲めないタブーが解け、彼女は温かい湯を飲む。続いて、トマ・クワサ(男性)が毀れた土鍋を籠の中に入れる。トマ・トンコナンは頭巾(Lulung)を外し同じ籠の中に入れる。トメバルンはこの籠と炉の火を竹にとったものを持ってトンコナン南側へ行き、そこで祖先神に供儀を行なう。この供儀では、米飯ともち米の竹筒料理がそなえられ、ひな鶏一羽が潰される。土鍋は竹の火で少し焙って地上に置かれる。ひな鶏の羽も火のついた竹の上に置かれる。さらに、彼はシサレアンを壊し、トンコナン南側に捨てる。以上が終わると、トマ・トンコナン

は今まで着ていた物を総て脱ぎすて、新たに黒いサロンと上着に着替える。これより、彼女はトンコナン北側へ出る事ができるようになる。しかし、トンコナン内バルアン及びスウの部分にはまだ入れない。また、米飯を食せないタブーはなお続く。なお、トマ・シンボロンのタブーは米飯以外が全て解かれる。続いて、トマ・トンコナンのタブーが一部解けたことを人々に報告する行為がある。遺族がトンコナン前で子豚を屠殺し肉片にする。儀礼役職者がトンコナン前に集まり、トマ・シンボロンの金太鼓を先頭にトマ・トンコナン、トマ・クワサ、遺族の順で反時計まわりに三周する。その間、周辺で見守る少数の村人、親族に豚肉の小片が配られる。次にトミナーはトマ・シンボロンをシンブアンの前に立たせ、「ウオットロ」と掛け声を三回言わせる。トミナーが簡単にマカカルンを行なうてこの日の儀礼行為は終る。

#### 第八日目 十月十日

死者に食を与える日(Ma pakande)といわれている。早朝、トメバルンが子豚を屠殺して死者に供儀。続いて、トマ・トンコナンが椰子の実で作った皿に、芋、とうもろこし、バナナを入れて死者に捧げる。また、死者の頭上の柱に竹籠を吊し、噛みタバコの材料を供える。日中、トミナー、儀礼役職者、遺族が「パッサール(市)へ行く」という行



進をする。実際にバッサールへ行くのではなく、行なわれるのは象徴的行為だけである。トミナー達は金太鼓を打ち鳴らしながらトンコナンから三十メートルほど西側へ歩き、そこへ座る。トミナーがトンコナン・トシバテの系譜と位置について簡単に語り、子豚を屠殺して竹筒料理にして皆に配る。そして一同はトンコナン前に戻り、サロアンの人々にバッサールから買い求めて来たと告げながら噛みタバコの材料のボル、カロシを配る。ひき続いて死者バナンの名を変える儀礼行為がある(Ma'ganti)。トンコナン前でトミナーはトマ・シンボロンに「ウオットロ」と三回叫ばせたのち、右手に傘(Lalan)をもち、トメバルンに「これよりバナン(Bannan)はムラギナ(Banulagina)と名を変えた」と告げる。トメバルンの了解の返事があってこの行為は終わる。死者が名を変えるのはディアバイ・ランクの葬儀のみである。

第十日目 十月十二日

死者をサリの天井に上げる日である(Mangallo)。午後、トメバルンが皮太鼓、トマ・トンコナンは金太鼓を打ち鳴らし、若者達が叫び声をあげながら遺体をエロンから床に降す。遺族の者が遺体を赤い布で軽く包む。輪にした藤に死者の体を通して、そのままトンコナン西側最上段まで持ち上げて屋根の梁に吊す。これとは別に今後の儀礼遂行

第十三日目 十月十五日

早朝、トマ・シンボロンが床下の竹筒(Bollo)を外してトンコナン内へ運ぶ。代って、トミナーがトンコナン床下の空間に水牛を入れ、一日そのままにする(Ma'pasul-lule)。この時彼は子豚を一匹屠殺する。

第十四日目 十月十六日

死者を天井から降ろす日(Palako seli)である。まず、夕方トメバルンの指示で、故人の孫達が遺体を中段まで下げる。夜になってこれを床へ降ろす。トメバルンが子豚を屠殺して供儀。終えると遺族の男性三人が足を出して座り、その上へ遺体をのせて二度目の布地巻きを行なう(Ma'balun to mate)。

第十五日目 十月十七日

目立った儀礼行為はない。出自集団のメンバーによってランテ外北部に、死者を安置する仮小屋(Lakian)を建てる。夕方、トメバルンが子豚を屠殺し死者に供儀を行なう。

第十六日目 十月十八日

祖先神に対して敬意を表わし、一晚中葬送歌を歌う(Ma'badong tua)。このために、トミナーは黒犬を撲殺し、この肉にて食事とする。

第十七日目 十月十九日

サダン・トラジャ族の葬送儀礼(秋野)

に必要な準備も行なわれる。まず遺体を運ぶ台サリカン(Sarikan)を作り始める。これに使用するカンニヤラ(Kannira)の木が運ばれて来るとトメバルンが子豚を屠殺して供儀を行なう。また、ランテ内の櫓(Barakkan)の柱(竹)のうちの一本をブアギン(Buangin)の木に替える。この為に、トミナーは黒犬一匹をランテ内で撲殺する。さらに彼は子豚を一匹屠殺しブアギンの木の下で供儀。供物は米飯、豚肉、サンバコ、ボル、カロシ、卵、もち米をサトウヤシの葉で包んで煮た物(Suke-Suke, Katupa)である。

第十一日目 十月十三日

死者の罪を取り消す(Mengkalosso)と呼ばれる日である。この行為は、トマ・クワサ(女性)が毀れた土鍋(Kurin)を死者の吊されている下へ置き、この中に炉の灰と炭を入れる。トミナーはブアギンの枝と枯れたサトウヤシの葉をトマ・トンコナンに渡し、彼女がこれらをクリンの中に入れて掻き回す。煙が立ちこめ天井の死者をおおう。これをもって故人の生前の罪が洗い清められる。また、この日の午後、出自集団のメンバーがランテに立てる石を探し、運んで来る。その石の前で黒い子犬を撲殺する。夕方には、皮太鼓をトンコナンの外に出す。皮太鼓はこれ以後使用しない。

儀礼主催者が水牛を引きつれて広場まで行進し、そこで親族、カンプンの人と共食を行なう。この行為は象徴的に「水牛がバッサールに行く」(Ma'pasa Tedong)と称される。この為に大豚を三匹屠殺する。行進はトマ・シンボロンが打ち鳴らす金太鼓を先頭にした行列で、儀礼役職者、遺族、水牛五頭が続く。この一行は広場に着くと反時計まわりに三周する。トミナーによるマカカルン、そして豚肉の分配、共食が行なわれる。闘牛(Siraga)、男性による足蹴り闘技(Sienha)も行なわれる。

夕方、死者をトンコナンから米倉アランに移す。まず、トメバルンが子豚を屠殺して死者に供儀。その間、出自集団のメンバーが米倉から稲束を一つとり出し、山刀とともに籠の中に入れる。死者がアランに移動した後この籠をトンコナン内に納める。死者によって稲が穢されないように一時避難させる象徴的行為である。トメバルンの供儀がおわると金太鼓が打ち鳴らされる中、遺体は若者達によって担がれ、トンコナンの外へ出る。アランの周りを反時計まわりに三回まわってから、アラン下の中段に南枕で安置される。この日はトンコナン内に誰も寝泊りできない。特にトメバルン、トマ・トンコナンは死者を墓に納める時までトンコナン内に入れなくなる。死者の移動にともなって、カンダオレ、槍、傘、旗もアラン前に移動させる。新たに、



竹竿にマヌック・マヌック (Manuk-manuk 木板で鶏の形をつくったもの)、ダロ・ダロ (Daro-daro 糸で菱形に巻いた飾り)、バナナ、ボール、カロンを吊す。

第十八日目 十月二十日

ランテに石を立てる (Me'batu)。この行為はトミナーの指揮のもと、部落長 (Kapala kampung) と出自集団のメンバーで行なう。トミナーは石の後に神の木 (Sendana) 右側にバアサッケ (Pasake) の植物を植える。そして彼は右手に鉄の掘棒、左手に竹筒 (鉄片 Pa'muntu とビーズ Manikiri をバアサッケの葉で包んでいれてある) をもち祈禱 (Majinbo)。続いて子豚を屠殺して供儀する。

午後、トマ・シンボロンがランテ内カリヤの木に人の顔を彫る。また槽の柱にも人の顔を彫った板をとりつける。夕方、死者に対し、遺子達は三度目の布地巻きを行ない、最後に金紙等で飾り付けをする。村の老女二人がひな鶏を潰して神と祖先神に供儀を行なった後、アラン前に座り、この日一晚、死者を見守る役割を果たす。

第十九日目 十月二日

死者は葬儀場ランテに移る (Makaren)。ランテ内で水牛を一頭屠殺し、出自集団のメンバーを中心に分配する。儀礼行為は以下のように展開する。早朝、トメバルンの指揮で故人を象徴するタウ・タウ人形 (Tau-tau) を作る。

この人形はブアギンの木を芯棒にし、その上に竹をかぶせ、顔の部分に布地 (Pondan) を巻き、赤い布をかぶせて目・眉をつける。そして、長袖の黒い上着を着せ、サロンをはかせる。頭上には皿をのせ、その上に更紗の布を飾る。また腕輪 (Balus) 、「ビーズの首飾り (Manik kata)」、古銭の首飾り (Manik uang) 、「噛みタバコ入れ (Sepu)」を取りつける。(故人が男性なら水牛の角をかぶせる)。完成するとトメバルンは子豚を屠殺しタウ・タウ人形の前で供儀。

さらに彼は、死者を安置する仮小屋 (Lakian) のそばで子豚を屠殺し供儀。終わると遺体をランテへ移動させる行為に移る。まず、近親の女性が遺体にとりすがって儀礼的に号泣する。続いてタウ・タウ人形のそばで号泣。遺体をサリカンに移す。遺体を囲んで葬送歌。そして、若者達はトマ・トンコナンもサリカンにのせ、神輿をかつぐごとく嬌声あげながら持ち上げ、金太鼓を先導に反時計まわりにランテに入っていく。遺体を仮小屋に西枕にして安置する。ランテでは、死者の右手が石に触れ合う (平行になる) ように安置するのが慣習である。この日より、儀礼役職者は遺体とともに仮小屋の上段で睡眠をとり、トメバルンは仮小屋の下にビニールをかこってその中で休む。

ランテにおいて水牛は合計八頭屠殺される (表Ⅱ参照)。分配方法は以下のようなものである。七頭分の水牛の頭部は角を

除いて、トンコナン・トシバテから分節した七出自集団 (Sangrapu) に贈与される (一頭分はトンコナン・トシバテがもらう)。また、出自集団トシバテには属していないが、トシバテと社会的結合関係を有しているトンコナンには、以下のように贈与される。①マ・サディ (ma'sadi、クリンからごはんを盛る意) と互いに呼び合う関係のトンコナンには水牛の腰半分と尻尾の部分。②マ・ギンボ (ma-ginbo 祈禱の意) と呼び合う関係へは腿より下の前足一本。

③マ・ナンバン (ma'nanban 水牛・豚肉を切る意) と呼び合う関係のトンコナンは二つあり、それぞれに横腹の部分の肉を贈る。被贈与者は、将来自己の葬送儀礼で返礼することになる。相互の関係は親密で「東側」の新築・改築儀礼 (mangrara banua) の際にも松明の授受を行なう。

この他に、トメバルンに片足一本 (彼は三、〇〇〇ルピアで村人に売る)。そしてトミナー、儀礼役職者、部落長、サロアンの人にも一部贈与される。しかし、ランテでの水牛肉の分配はあくまでも出自集団トシバテのメンバーが中心で、彼らが最も多く受けとる。

第二十日目 十月二日

死者の日 (Allona to mate) と呼ばれている。早朝、水牛一頭、大豚子豚各一匹屠殺する。分配に先立って、トミナー二人が槽に登り象徴的な分与を行なう。まず、前日

サダン・トラジャ族の葬送儀礼 (秋野)

の水牛は死者の亡夫へ、今朝の水牛は祖先神へ贈ったことを告げる。次に豚肉の小片を「土地の精霊に捧げる」と称して地上に放る。続いて、水牛肉の小片を「この地域の第一階層 (To ma kaka)」、第二階層 (Bulo di a'pa)、トミナーの祖先、稲の創造主に捧げる」と称し、それぞれ下に放る。これらの肉は誰れも拾うことがない。最後に水牛を元気づけると称して二五ルピアのお金を下に放り、彼らは槽から降りる。

この地域の世界観では、死者は水牛を「あの世」へもって行くと考えている。そして、「あの世」では、水牛の屠殺数の多い人ほど、強い力をもつのである。それゆえ、死者にとって、水牛の屠殺数が多いほどあの世で幸せになれると信じられている。

第二十一日目 十月二日

死者を墓に納める (Ma'pian) 日である。早朝水牛を六頭屠殺する。儀礼行為はここで節目をつける段階に入る。トメバルンはタウ・タウ人形の前で、子豚を屠殺し供儀を行なった後、人形を解体する。死者を仮小屋から地上のサリカンの上に降ろす。そこで遺族、近親の女性達が号泣し、その後、出自集団のメンバーがトメバルンの報酬として小額ずつ出し合い、集まった一万ルピアを支払う。(原則では水牛一頭といわれており、この金額に彼は不満であった。)



これを受取ると、彼はトマ・トンコナンを前に座らせ、喪があけるための祈禱を行なう。終えると、彼女の呼び名は本名にもどり、トンコナンへ入る。トメバルンはここで帰宅する。この後遺体は、若者達によって岩の壁面に掘られた墓に運ばれ納められる。この時、故人の三男が子豚を一匹屠殺する。死者の屍汁の入った竹筒は壁面より地上に落とす。旗とマヌック・マヌックの竹竿を墓の下に突き刺し、人々は帰宅する。トンコナンではサリにて清めの行為がある。トマ・トンコナンから本名にもどった長女が、サトウヤシの葉でサリ内を掃き、ゴミを穴に落とすしぐさを行なう。続いて子豚を屠殺し、彼女が西むきで神と祖先神に供儀を行なう。この供物も穴より地上へおとす。そして柄杓(Timba)で水を三回穴に注ぐ。この後、彼女は、高坏状の木皿に赤いごはんを盛り食する。米飯のタブーが解けたのである。

## 第二十二日目 十月二十四日

葬送儀礼が無事終えたことを神と祖先神に報告し感謝する供儀が行なわれる。子豚一匹、鶏二羽を屠殺する。場所はトンコナンの西側、アランの北側、トンコナン内サリの三ヶ所である。

## 第二十四日目 十月二十六日

大豚を一匹屠殺し、出自集団のメンバー及びサロアンの

人々で慰労の共食がもたれる。以上をもって葬送儀礼の全過程が終わる。

## おわりに

本稿の調査事例から、トラジャの葬送儀礼では現世から来世へ通過するために念入りの象徴的行為と多数の水牛・豚の屠殺を行なっている。この象徴的儀礼行為は世界の多くの葬儀と同様、死によって乱された宇宙秩序を回復するために行なうのである。「ディラパイ」の名称が平和にするという意であることからそのことを象徴している。なお、個々の儀礼行為についてはトラジャ人がそのすべての意味を理解しているわけではなく、多くは長年の慣習による行為である。なかには競売行為等、最近の社会的現実が正当化され、取入れられているものもある。しかしながら、儀礼過程にはトラジャの創造神話、祖先神話が埋めこまれ反映している。

一方、葬送儀礼の社会的機能については、財であり交換財として社会的価値を有している水牛の屠殺という消費行動を見逃すことができない。水牛肉の贈与対象は第三章で既述したごとく、トンコナンの創設者を共通の祖として系譜的に結びついた出自集団、地縁集団サロアン、そしてカ

Dirapai puli misa 儀礼における豚・水牛・鶏の屠殺数

	1981年 月 日	豚		水牛		鶏	犬 (頭)
		子豚	成豚	成牛	成牛		
1	10. 3.	2	1	34	1	41	1
2	4.	2	5	成牛	8		
3	5.	1		成	3		
4	6.	1					
5	7. Tarro*						
6	8.	2				41	1
7	9. Tarro						
8	10.	3					
9	11. Tarro						
10	12.	2					1
11	13.	2					31
12	14. Tarro						
13	15.	1					
14	16.	1					
15	17.	1					
16	18.						1
17	19.	1	3				
18	20.	3				41	1
19	21.	2		成	1		
20	22.	1	1	成	1		
21	23.	3		成	6		
22	24.	1				2	
23	25. Tarro						
24	26.		1				
合 計		29	11	20		5	3

\* Tarro 休息日

&lt; 表 2 &gt;

ンブンである。トラジャにあってこの三つの社会集団は重要で、個々のトラジャ人はこれらの社会集団の一員として行動し存在している。そしてこれらの社会集団内及び集団間を統合する社会秩序原理は、肉の贈与を主題とした葬送儀礼の慣習に基づいている。肉の贈与は一方的にその場限りで終わるものでなく、必ず贈与に対する返還が将来なされ繰りかえされる。この肉の贈答関係を拒否することは人間関係を断絶することである。このように水牛肉の贈答慣行は社会集団の連帯感を強める一方、人間関係を相互に規制することになる。また、遺子達は葬儀において提供した水牛の頭数に比例配分して土地の相続を受ける。これは水牛の屠殺が土地所有の社会的認知を意味しているということと、言わば近代社会の「相続法」の役割を果していることになる。儀礼システムを忠実に実行することこそ、トラジャ人が人間関係での不和・争いを避ける道である。こうしたことからトラジャの社会秩序の骨組が葬送儀礼によって支えられていることが理解できる。換言すれば、トラジャの葬送儀礼は世俗的世界と象徴的世界を結びつける一方、近代法とは異なる「法」の役割を果たしており、そのことによって社会統合が成立しているのである。

注

- (1) Geertz, H.: "Indonesian Cultures and Communities",

in Ruth T. Mevey (ed.), *Indonesia*, New Haven, HRAF Press, 1963, p. 24.

- (2) 南スラウェシ州タナ・トラジャ県の村落調査は一九七二年八月〜十月、一九八〇年十月〜一九八一年十二月にかけて行なわれた。本稿は二度目に行なったタナ・トラジャ東北部スセアン郡での調査に基づいている。

- (3) トラジャの葬送儀礼に関しては、今まで石川栄吉『南太平洋』角川書店一九七九、山下晋司「肉の政治学」『民族学研究』一九七九。Crystal, E.: *Ceremonies of the Ancestors*, Pacific Discovery, California Academy of Sciences, 1976. Tangdilintin: *Upacara Pemakaman Adat Toraja*, Yayasan Lepongan Bolan, Tana Toraja, 1980. などがある。

(4) Salombe, C.: *Orang Toraja dengan Ritusnya*, in *memorian Laso Rinding Puang Sangalla* STP Prater, Ujung Pandang, 1973, p. 7. Nooy-Palm: *The Sada Toraja*, *Verhandelingen*, 87, 1979, p. 6.

(5) Frank, C. & Cooby: *The Churches on Sulawesi*, Indonesia, Church & Society, Friendship Press Inc., 1968, p. 81.

(6) Ibid. 1968, p. 82.

(7) Volkman: *The Pig has eaten the Vegetables*, *Ritual and Change in Tana Toraja*, Ph. D. Cornell University, 1980, pp. (123-125).

(8) トンコナンは高床式住居で舟形屋形という特徴をもっている。壁面に木彫をはきし、全て北向きに立てられている。内部は一般的に三室からなり(図1参照)、中央部のサリは台所・食堂・居間を兼ねている。

- (9) To mebalun は死体を布地で巻く人の意である。葬儀だけにかかわる祭司者であるところから、このような名称が象徴的につけられたのである。彼は最も下位の階層に属する。村人は穢れの觀念から日常彼と話したり、住居に入れることをきかう。葬儀中においても彼の使用する鍋・皿は家族の者と別である。とはいえ、伝統的葬儀では欠かせない存在だけに儀礼中は尊重される。なお、彼はマネネの儀礼の時はトミナーカイリ (Tominaa Kairi 左のトミナー) と名が変わる。

- (10) ランテ (Rante) は、出自集団の管理下にある葬儀広場である。水牛屠殺をなす伝統的葬儀にて一〜二つの石を立てる。調査地域ではこの石は円形になるように立てられている。

- (11) 調査地域スセアンでは三層の身分制度が存在する。第一階層 Tomakaka (年長者の意) 第二階層 Bulo dipa'pa' (束ねた竹の意) 第三階層 Talang dipanapi' (束ね縛った竹の意) である。インドネシア共和国として独立後、この身分制度は廃止されたが、なお日常生活の一部に階層の規制が働いている。

- (12) Tominaa はトラジャ社会の神話・慣習についてたけた人である。男系親をたどって継承され、村人からも尊敬される。「東側」「西側」・マネネの儀礼にかかわり、儀礼進行の指揮、祈禱を行なう、なお、この他に祭司者は「東側」の儀礼マップにかかわるトブラケ To burake と既述したトメバハンが存在する。

- (13) スウ (Suu) はトンコナンの建築儀礼で必ず神・祖先神に供儀をなす場である。象徴的世界では神的領域と考えられる。
- (14) Kruyt, A. C.: "Right and Left in Central Celebes", in

サダン・トラジャ族の葬送儀礼 (秋野)

Rodney Needham (ed.), *Right and Left: Essays on Dual Symbolic Classification*, The University of Chicago Press, 1973, pp. 74-91. この論文でクロイトは多数の事例をあげ「右」の優位性を強調している。

(15) 拙稿「トラジャ族」『地理』第二〇巻第十一号、一九七四にて、同様の問題を指摘している。

(国際基督教大学講師)